



TITLE:

# 戦前戦中の欧米諸国及び日本における地政学の動向

AUTHOR(S):

柴田, 陽一

---

CITATION:

柴田, 陽一. 戦前戦中の欧米諸国及び日本における地政学の動向. 『グローバルイゼーション下の国土計画を考える --東アジアとの交流の深化を踏まえて (調査業務)』 2014: 112-144

ISSUE DATE:

2014-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/191084>

RIGHT:

© 2014 一般財団法人 日本開発構想研究所

#### 4・3・3 戦前戦中の欧米諸国及び日本における地政学の動向（柴田陽一氏）

##### 開会

司会 本日は、京都大学人文科学研究所の産官学連携研究員でいらっしゃる柴田陽一様にお話を伺うことになっています。

きょうの演題は「戦前戦中の欧米諸国及び日本における地政学の動向」です。われわれは国土計画研究会と称しておりまして、国土計画におけるいろいろな諸課題について勉強しているのですが、そのうちの一つとして、地政学について興味があるところです。

ご承知のように、日本の場合、戦前はいざ知らず、戦後はどちらかというとアメリカ流の国内資源開発に国土計画は注力してきたわけですが、時代がだんだん変わってきた中で、ある意味でタブー視されてきた地政学というものを、今後の国土政策の中で考えていく必要があるものか否かを吟味してみよう、ということになりました。

ただ、何分にもその部分については蓄積もございませんし、戦後、ある意味では封殺された学問領域ですので、そういう情報も少ない中で、先生が小牧実繁について随分書かれているものを拝見しました。

そういうところから、きょうは、かなりゼネラルな地政学のお話をいただけるようですが、われわれの関心事は、「国土政策における地政学のあり方は如何？」という観点です。ただ、きょうは原題に沿ったお話をいただければと思います。

1時間くらいお話をいただいて、その後、意見交換・質疑応答をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

##### 自己紹介

柴田 柴田陽一と申します。よろしくお願いします。

先ほど名刺をいただきましたが、正直申し上げて、これまで「〇〇省〇〇課」という肩書の方々とはほとんどお話ししたことがございません。

いま川上さんから「ゼネラルな」という話がありまして、恐らくみなさまが最も聞きたいと思われることについてはお話しできないのではないかとと思うのですが、まずこちらで用意してきたところから話を始めさせていただきます。

司会 最初に申し上げましたように、われわれは、どちらかというと一般的な知識そのものもありませんので、そういう話もありがたいと思います。

柴田 まず簡単に自己紹介します。すでにプロフィールをおつくりいただいているので、簡単に言いますと、81年に香川県で生まれた後、小学校から神戸で育ちました。関西学院大学と神戸大学を出て、京都大学大学院文学研究科に入学し、その後、文学研究科から徒歩3分くらいの人文科学研究所に移りました。最初は学振の特別研究員だったのですが、その後、産官学連携研究員という、何かいかめしいけれど実は非常勤研究員という立場で研究所に在籍しています。そういう関係で、いまは京大ほか、いろいろな大学で非常勤講師を務めつつ、研究を続けていることになります。

専門は、地政学を中心とした地理学史研究なのですが、最近は小中高の地理教育の問題とか、教育資源の配置に関する教育地理学的な研究とか、軍港を中心とした近代都市史とか、満洲を中心とした植民地研究など、いろいろなことに手を出しています。

私の「地政学関連論文リスト」(表 1) をレジュメに載せておきました。先ほどお配りした抜刷が 8 本目で、これまで小牧実繁 (1898-1990) という京都帝国大学の地理学の教授をやっていた人物とその周辺などを中心に、研究を少しずつ進めています。

(1) (2) (3) が京都帝大のグループ、(4) (5) (6) は、「満洲国」における地理学者、特に地政学に興味を持った人たちの話で、(7) (8) は京都帝大のグループに戻っている、という状況です。

表 1 報告者の地政学関連論文リスト

- |     |  |
|-----|--|
| (1) | 「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」『歴史地理学』47 巻 2 号、2005 年 3 月  |
| (2) | 「小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立—個人史的側面に注目して—」『人文地理』58 巻 1 号、2006 年 2 月   |
| (3) | 「アジア・太平洋戦争期の戦略研究における地理学者の役割—総合地理研究会と陸軍参謀本部—」『歴史地理学』49 巻 5 号、2007 年 12 月  |
| (4) | 「「満洲国」における地理学者の活動とその特徴」石川禎浩編『中国社会主义文化の研究』京都大学人文科学研究所、2010 年 5 月 (中国語版、2012 年 3 月)  |
| (5) | 「建国大学における地理学者とその活動—宮川善造を中心に—」『史林』94 巻 5 号、2011 年 9 月   |
| (6) | 「満鉄調査部における地理学者の思想的展開—増田忠雄の「文化圏」研究と地政学への接近に注目して—」『空間・社会・地理思想』16 号、2013 年 3 月  |
| (7) | 'Ideas and Practices of the Kyoto School of Japanese Geopolitics', Toshiyuki Shimazu ed., <i>Languages, Materiality, and the Construction of Geographical Modernities: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought (10)</i> , Department of Geography, Wakayama University, 2014 年 3 月 |
| (8) | 「思想戦と「日本地政学」—小牧実繁のプロパガンダ活動の展開とその社会的影響—」『人文学報』105 号、2014 年 6 月  |

KURENAI という京大リポジトリにアクセスすれば、全文が見られるようになっていきます。きょう、抜刷を全部持ってこようかと思ったのですが、残部がほぼないものもありますので、そこで見ていただければと思います。

阿部さんからいただいたメールの中で、「戦前戦中の地政学者小牧実繁京大教授の研究者であり」とか、その次の「戦前戦中の地政学の動向及び地政学的視点から構想された大東亜共栄圏にお詳しい」くらいはそうなのですが、「地政学」的視点から見た日本国土計画への示唆を頂き」というところは、ちょっと私の力を超えていますので、その辺はどうなるかわかりませんが、まず一般的な話から始めさせていただきたいと思います。

## 欧米諸国の地政学

まず「地政学とは…」という箇所から話を始めさせていただきます。伝統的な地政学（ないしは古典地政学）といわれるような、20世紀前半までの帝国主義の時代に行われていた地政学は、いろいろな定義があつて、それもまた難しいところではあるのですが、大まかに言えば、「国家の地理的位置やそれを取りまく地理的条件の理解をもとに、大国間の政治的関係、特に軍事的対立を含む外交の分析を行い、特定の国家の軍事・外交政策への応用を目指す学問分野」なので、国があれば国の数だけ地政学はあることになります。それぞれの国の中で、学者や官僚といった人たちが地政学的世界観をつくり出すわけですが、それぞれの国によって微妙に違うものになっています。

特に第二次世界大戦にかけて、つまりは第一次世界大戦後、地政学はドイツや日本を中心に発展したのですが、戦後は、枢軸国といわれる国々の「侵略戦争」を正当化した学問分野として否定的な評価を受けました。日本でもドイツでも関係者が公職追放されるなど、社会的制裁を受けましたし、学界にかなり傷跡を残しています。

僕は地理学の出身なので、特に地理学の話をする、政治地理学という分野があり、戦前は地政学と同様、国家的なスケールを扱う領域だったのですが、戦後の政治地理学という分野は、地政学に対する反省から、国内の市町村合併とか選挙分析という方向に向かいました。特に国際的なスケールは扱わないでおうという雰囲気が、80年代くらいまでずっと続いたそうです。

英語圏では、ドイツの地政学に対する拒否感があつて研究が盛んではなかったのですが、アメリカの国務長官をやっていたキッシンジャー（Henry Kissinger, 1923-）が「ジオポリティカル（Geopolitical）」という言葉を用いた場面が増えてから、地政学に対する拒否感がだいぶ薄れ、1970年代後半から80年代にかけて、地政学に対する関心が復活していくことが認められます。

そして、キッシンジャーに始まる地政学復活の動きが日本にも入ってきて、きょうはそのリストを持ってこなかったのですが、倉前盛通（1925-1991）さんが『悪の論理』というタイトルで地政学の主張をしたり<sup>1</sup>、1970年代末から80年代前半にかけて、そういうタイプの地政学の本がたくさん出版されています。

しかし、地理学、要するにアカデミックなほうから見ると、そういった本はとても学術的な検討にたえられるようなものではなく、一般受けするような形で本を書いただけ、とみなさざるを得ない代物でした。

### 「新しい地政学」、「批判地政学」

学術的な意味では、1980年代に入ると、英語圏の特にアメリカとイギリスの政治地理学で、「新しい地政学」という分野が登場いたします。それは「地政学」という名前はついているのですが、軍事や外交などの国政や国際関係を分析対象とする政治地理学といった意味合いです。

英米でも、選挙分析や市町村合併などの分析に傾いていたところ、新しい形で国際関係



を扱うときに「新しい地政学」という名前をつけたという形ですね。中でも、「批判地政学 (Critical Geopolitics)」という分野は、地政学を言説の実践としてとらえ直そうとしている点で注目される分野となっています。

これは、もう少し遅れて 80 年代の後半から 90 年代前半にかけて一気に出てきた分野なのですが、「地政言説」というものを考えていきます。それは、特定の文化が描き出す世界政治に関する地理的な物語やイメージのことを指しています。

こういった地政言説というものが、古典地政学の実践者たちがやっていたことなのではないか、という見方をするわけですね。いまからお話するマッキンダーなどが示した地政学的世界観も全部、地政言説であるとも言えるわけですが、こういった批判地政学の立場に立つと、地政学の特徴は 3 つあるといわれています<sup>2</sup>。

1 つは、地政言説は、世界情勢における権力と危険についての切実な問いを発します。「本当に危険で、直ちにどうにかしなければならないよ」ということを訴えかけてくるような文体というかレトリックになっています。

2 つ目、地政学の魅力は、複雑な世界を「敵と味方」、あるいは「狂信と文明」といった地域に二分して、世界政治についての単純化した枠組みを提供することにあります。

3 つ目、それで地政学が人気を博する理由は、それが一種、魔法のごとく世界の情勢の将来的方向性についての洞察を与えるように見えるからです。

僕もだいたいこの意見に賛成しています。こういった考え方からすると、いまから紹介していく何人かの地政学の戦略家が「現実ですよ」として示した世界は、実は特定の時間と空間の文脈から描き出されたものに過ぎないし、また、多様で複雑な現実があるにもかかわらず、それを特定の視点から単純化してみせたものに過ぎない、という理解が得られるでしょう<sup>3</sup>。

## 欧米の地政学の戦略家

これから紹介していくのは、19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、世界の有名な地政学の戦略家がどんな世界観を示していたのか、ということです。

右端に「アメリカ」などと国名を書きおきましたが、それを見れば分かるように、いろいろな国の人が出てきます。

### <マハン>

最初にマハン (Alfred Thayer Mahan, 1840-1914) は、わりと有名な海軍の軍人で、アメリカの海軍大学校の教官を務めたりした人物ですが、1890 年に『海上権力史論 (*The Influence of Sea Power upon History*)』と日本で呼ばれている本<sup>4</sup>を出版しています。過去何世紀かにわたる海軍とか海戦の歴史を紐解きまして、世界の歴史が、ある種ランドパワーという陸上の勢力と、シーパワーという海上の勢力を中心とする国々の争いの歴史として見られるのではないかととらえました。「アメリカが今後うまくやっていくには、そういった状況を理解して、この勢力均衡を図ることが賢明であろう」という結論を出し

たわけです。

そのランドパワー対シーパワー的な考え方は、日本の軍人にも大きな影響を与えていまして、『海上権力史論』が出版された 6 年後に翻訳が出ています<sup>5</sup>。

その後、マッキンダーやラッツェルなどが出てきますが、マハンにいろいろ影響を受けていますので、順番に見ていきたいと思います。

## ＜マッキンダー＞

次は、イギリスのマッキンダー（Sir Halford John Mackinder, 1861-1947）という人物です。彼はオクスフォード大学の地理学の最初の教授に就任したり、ロンドン大学でもそういう仕事をしたり、後には政治家にもなりましたし、それ以前には登山家として名をはせた人でもありました。

彼はいろいろな仕事をしていますが、地政学に関して有名な著作は、1 つは 1904 年にイギリスの王立地理学協会で講演をした「歴史の地理的回転軸（The Geographical Pivot of History）」一訳し方はいろいろあります—の論文、というか講演録です。もう 1 つは、第一次世界大戦後の 1919 年にあらわした『デモクラシーの理想と現実（*Democratic Ideals and Reality*）』です。この 2 つの著作が特に有名です<sup>6</sup>。

彼の認識は、イギリスは世界じゅうに植民地を持った一大帝国であったけれど、19 世紀末から 20 世紀最初にかけてはだんだん衰えてきつつある。それに対して、ドイツのあたりでは新しい勢力が勃興してきて、何かそこにしてやられるのではないか、という危機感がどうもあったようです。

あとは、世界中の交通システムが整備され、かつてはばらばらにいろいろな国々が成り立っていた世界だったのですが、完全につながり、いわば閉鎖された政治システムになった、という認識がありました。

その中で、どうやって国を維持していくかが重要な課題である、とマッキンダーは考えたわけですね。マハンが唱えていた「ランドパワー対シーパワー」的な見方を継承しているわけですが、「今後、特にランドパワーが脅威となるはずに違いない」ということを言うんですね。

図 1 にもありますが、ピボットエリア（Pivot Area）という、いまのロシアというか、後にハートランド（Heartland）といわれる場所が、「これから重要な役割を果たすに違いない

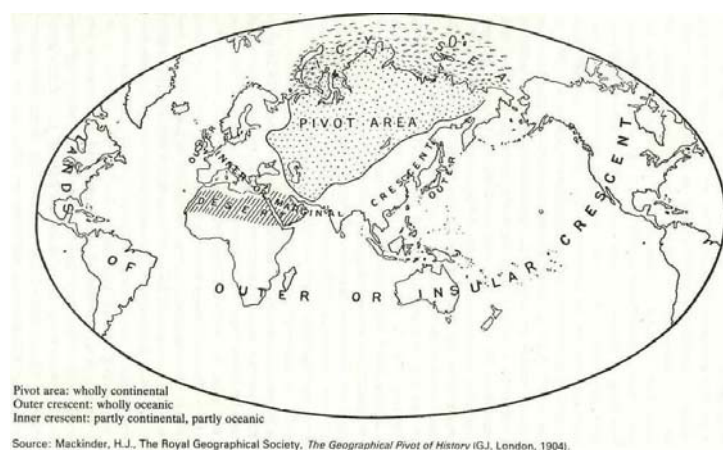


図 1 マッキンダーの地政学的世界観（1904 年）

資料：Geoffrey Parker, *Western Geopolitical Thought in the Twentieth Century*, Croom Helm, 1985, p.18

い」と考えていたわけです。要は、北は氷の海があって、北からは侵略できないわけですね。周りを見ても、海上からは一定程度離れた場所であって、陸上の力が重要な役割を果たす場所であると考えていました。なので、そこに一大勢力が生まれれば、どんどん力を蓄え、それで一気に外にあふれ出てくるに違いない、みたいなことを考えています。

最初は「ピボットエリア」だったのですが、1919年には「ハートランド」といわれるようになりました。「ハートランド」にすると、もう少しエリアが拡大し、東欧の辺にちょっとかかってきたり、東側も少し拡大したりという違いはあるのですが、コンセプトとしてはだいたい同じです。

その周りに「三日月地帯 (Crescent)」といわれるものがあります。最初の一つ、内側の三日月地帯はピボットエリアの周りを囲んでいます。外側の三日月地帯は、サハラ砂漠よりも南のほうにあります。つまりは、「ピボットエリアを中心として世界は成り立っているんだ」という図をつくっているのです。この考えは、後になかなり大きな影響力を及ぼしていくことになります。

ピボットエリアの中では、鉄道が発達し、陸上輸送がスムーズになされ、とにかく資源もあって物資が蓄積されて、パワーが拡大していく。

ドイツとロシア（当時はソ連でしたか）あたりのエリアが、とにかくイギリスに脅威をもたらすに違いない、という見方があるわけです。ですので、イギリスとしては東欧が重要でありまして、「東欧を制するものは世界を制する」という警句までマッキンダーは発することになります。

しかし、考えてみれば、こういう観察は、あくまで大陸の位置関係などに基づく地理的な決定論に過ぎないわけです。それがダメだとは言いませんけれど。

ともあれ、こういう大局的な視点からの世界観をつくり出すところに、地政学のおもしろさと限界があると思われます。

## ＜ラッツェル＞

次はラッツェル (Friedrich Ratzel, 1844-1904) です。ドイツの人で、晩年はライプツィヒ大学の地理学教授をしていました。彼は『人類地理学 (Anthropo-geographie)』と『政治地理学 (Politische Geographie)』という著作—他にも『ドイツ (Deutschland)』や『アジア民族誌 (Völkerkunde)』、『海洋論 (Das Meer als Quelle der Völkergrosse)』などいろいろあるのですが—で有名です<sup>7</sup>。

政治地理学の世界では、政治地理学の創始者であり、国家有機体説の立場を打ち出した人物として有名です。あと特に重要なのは「レーベンスラウム (Lebensraum)」という考え方です。これは、日本語訳がいろいろあってなかなか難しいところですが、生存空間、生活空間、生存圏など、いろいろ訳語があてられていて、なかなか一致しません。

しかし、この考え方が重要であって、国家というのが一つの生物としてとらえられ、だからこそ不足したら周りを確保してでもその生命を維持していく必要がある、というような考え方になっていきます。ある意味で国家の対外膨張を正当化するような論理として、

この「レーベンスラウム」が出てくることになります。

### ＜チェレーン＞

次はチェレーン（Rudolf Kjellén、1864-1922）です。ドイツのラッツェルのもとで学んだスウェーデン人で、ウプサラ大学の国家学の教授を務めていました。彼の著作もいろいろあるのですが、最も影響力のあるのは『生活形態としての国家（*Der Staat als Lebensform*）』という、スウェーデン語版が 1916 年、ドイツ語版が 1917 年に出た本です<sup>8</sup>。

彼の重要な概念としては、「アウトアルキー（経済自足論）」といわれるものがあります。彼もラッツェルから影響を受けていますので、国家有機体説の立場に立っています。

あとは、1898 年か 1899 年あたりに発表した論文の中で、「ゲオポリティク（Geopolitik）」という言葉は初めて使った、つまり、「地政学」という言葉の創始者であるとされています。

彼は、もともと新しい国家学を打ち立てようとする中で、5 つの分析手法の中の 1 つとして「地政学」という言葉を使ったのですが、後にこの地政学だけがすごく脚光を浴びていくことになったわけです。

### ＜ハウスホーファー＞

次はハウスホーファー（Karl Haushofer、1869-1946）という、日本の地政学を考える上ですごく重要な人物です。彼は、ドイツ陸軍の軍人をしていて、第一次世界大戦後はミュンヘン大学に勤めています。ただし、彼は大学教授としてどれだけの地位にいたのか、フルタイムの教授だったのかどうかについてはいろいろ議論があって、肩書的には一応そうだけれど、実質は 1 コマ・2 コマを持っているだけの非常勤講師的な立場に過ぎなかったとか、いろいろな説があります。

彼は軍人から始まり、地理学者ないしは地政学者として活躍する人物ですが、1908～1910 年に、駐在武官として日本に滞在した経験があるんですね。京都の伏見のあたりにいまして、その経験をもとに日本に関する博士論文を書いて博士号を取得する、という経歴の持ち主です。

彼は、第一次世界大戦までは実際に従軍していたのですが、その後、退役となり、ミュンヘン大に勤めることになります。1919 年に、ルドルフ・ヘスという、ナチスの中では重要な役割を占めた人物が、ミュンヘンの彼のもとに学びに来るという形で、両者は知り合いになります。ハウスホーファーは、ヘスを通じて、彼の上司であったヒットラーとも接触をしています。

ヒットラーが反乱を起こして収監されたとき、牢屋に訪ねていき、『我が闘争（*Mein Kampf*）』の理論的背景となるようなものを授けたみたいな話もあるのですが、そこはかなり検討を要する事項になっています。

しかし、ハウスホーファーがヘスやヒットラーと知り合いだったことは事実です。



1933年にナチスが政権を獲得した後は、ハウスホーファーはドイツ・アカデミーの総裁など幾つかの重要なポストにつきます。これは地政学者として有名であったこともありますが、ヘスやヒトラーとの関係がバックにあったことはほぼ間違いないと思われます。

ハウスホーファーは1924年に『地政学雑誌 (*Zeitschrift für Geopolitik*)』を創刊しています。あと代表的な著作として、『太平洋地政学 (*Geopolitik des Pazifischen Ozeans*)』という本が24年、共著の『地政学の基礎 (*Bausteine zur Geopolitik*)』という本が28年、彼の主張である「大陸ブロック論」について書いた本が1941年に出ています。

あとは、これまでの研究でもそれほど注目されていないのですが、実は日本関係の本も多く出版しています。

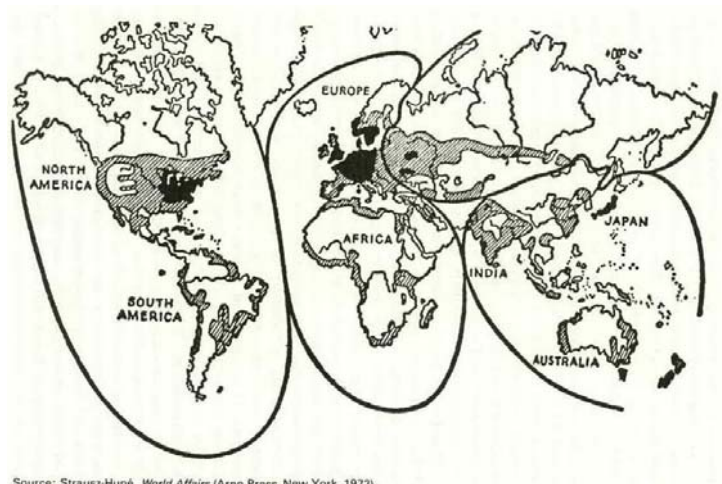
彼の主張の中で重要なのは、ドイツとソ連と日本が手を組めばよいという、ユーラシアの「大陸ブロック論」といわれるものです。彼もランドパワーとシーパワー的な見方は、マッキンダー的あるいはマハンの見方の影響を受けていて、「ランドパワーであるドイツ、ピボットエリアとかハートランドといわれるソ連、さらには日本まで組めば最強に違いない」という考え方をしていたようでありまして、「大陸ブロック論」の実現にかなり奔走しています。要するに、日本の軍人たちと実際に何度も会って、そういった考え方が日本で高まるように働きかけたりしているわけです。

もう一つは、「パン・リージョン (Pan-region)」といわれる考え方です。最初は世界を3つに区分していたのですが、**図2**は41年のバージョンで、4つのパン・リージョン、汎地域に区切るべきであろうと彼は考えていたのです。

最初は、南北アメリカ、ヨーロッパ・アフリカ、アジアの3つのパン・リージョンを築けばいいと考えていたわけですが、「ソ連の力は強い」ということで、4つ目のパン・リージョンをソ連に割り当てました。

ソ連を除けば、基本は南半球と北半球を縦断するような広大な地域でありまして、自給自足を維持していくためには、アメリカとドイツと日本の3国を中心とした、こういう地域ができ上がれば、世界はおのずと勢力均衡が保たれるに違いない、と考えていたわけです。

注目すべきは、彼は戦中及び戦後の間、ナチスの政策に大きな影響を与えた人物とみな



Source: Strausz-Hupé, World Affairs (Arno Press, New York, 1972).

図2 ハウスホーファーの地政学的世界観 (1941年)  
資料: Parker, p.74.

されていた。ここで「いた」というのは、実際には途中から与えていなかったからですが、彼が勤めていたミュンヘン大の近くには、地政学研究所といわれるものがあるに違いない、と考えられていました。

戦争中のアメリカの雑誌をめくってみると、そこに研究所で 1,000 人の科学者が働いていて、ハウスホーファーの手足となって地政学の研究をしている、という記事がまことしやかに書かれています<sup>9</sup>。

だからこそ、戦後、ドイツを占領した連合国軍は、そのミュンヘンの地政学研究所を探しに行くのですが、実は何もなかった、ということがありました。

彼は、ヘスと知り合いで、ヒットラーとも知り合いということで、とにかく彼の影響力は強いとみなされていましたので、戦争中にアメリカでつくられた映画では、ハウスホーファーが、地球儀を回しながら戦略を指示するような場面が出てきたりします。

ということで本当に過大視されていまして、それが 1980 年代くらいまでずっと、英語の文献では、地政学研究所があるかのごとくの記述が、学術論文の中でさえ繰り返されていたりしたんですね。それほどある意味で「神話」というのがすごく強い作用を及ぼしたのが、ハウスホーファーの例です<sup>10</sup>。

しかし、実際のところドイツは、いろいろな理由はあるかもしれませんが、彼が唱えていた「大陸ブロック論」に全く反する行動をとったわけです。それまでは不可侵条約を結んでいたにもかかわらず、1941 年にソ連侵攻をして、「大陸ブロック論」の実現可能性が完全についえます。

さらには、知り合いであったヘスが、なぜかよくわからないけれど、イギリスへ単独飛行するという事件が 41 年に起きました。

これ以降ハウスホーファーは完全に力を失っていまして、「ハウスホーファー家の悲劇」とよく言われますが、息子のアルブレヒトがベルリン大の地理学の教授をしていたのですが、戦争末期に反逆の罪で逮捕され、本当にもうすぐ戦争が終わるというタイミングに処刑されて亡くなっています。また戦後、ハウスホーファー自身も連合国軍の取り調べを受け大した罪には問われなかったけれど、妻とともに自殺をします。

ドイツ地政学というのは、「ハウスホーファー家の悲劇」に代表されるところになっています。

ハウスホーファーを中心とするドイツ地政学の手法としては、サジェスティブ・マップ (Suggestive Map) —暗示的な地図とか訳し方はいろいろ

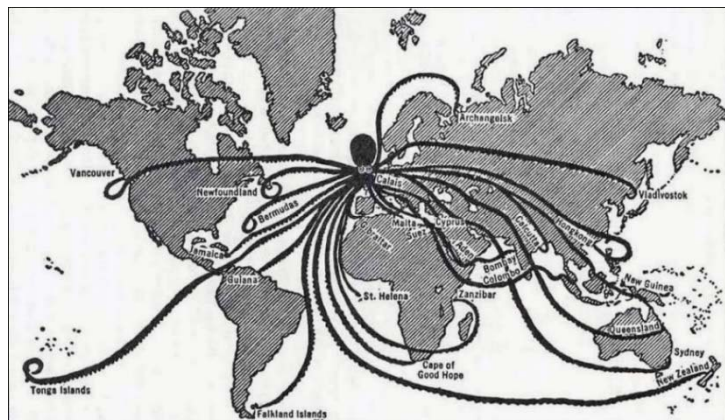


図 3 大英帝国の影響力を表したサジェスティブ・マップの一例 (1942 年)

資料 : Parker, p.68



ろあると思いますがーという、黒と白で塗り分ける地図がしばしば使用されました。図3はイギリスの上にタコが乗っているのですが、イギリスが世界じゅうの海軍の本拠地として影響力を及ぼしている様子をタコの足で表現した、という図です。こういった刺激的な地図をたくさんつくっています。

### ＜ボウマン＞

ボウマン (Isaiah Bowman、1878-1950) はアメリカの政治地理学者で、第一次世界大戦後の国境線確定という大きな仕事をしました。

図4は彼の著書『新世界 (The New World)』(1921年) からとってきたものですが、第一次世界大戦後のドイツの国境線の変化を示したものです。チームであれこれ話し合った結果、「ここに引くべきだろう」とか、そういった地図をつくっていきます。これは、ドイツからすれば我慢ならないものとして映ることになります。



図4 ボウマン『新世界』に示された第一次世界大戦後のドイツの国境線  
資料：Parker, p.52.

### ＜スパイクマン＞

最後にスパイクマン (Nicholas J. Spykman、1878-1943) という人物を紹介しておきます。アメリカの国際関係学者で、死後、『平和の地理学 (The Geography of the Peace)』という本が出版されました<sup>11</sup>。

図5の中で、矢印で示されているところが彼の重要な主張です。つまり、ハートランドの外側に「リムランド (Rimland)」といわれる地域があると彼は考えていまして、「それこそが世界の争いの原因となっている地域であり、ここをどうするかが今後の世界を考える上で重要だ」という考え方を示したわけです。

いろいろと話してきましたが、19世紀末から20世紀前半にかけて、こういった感じで欧米諸国においていろいろな地政学の戦略家が出てきました。彼らは、それぞれに特定の文脈から彼らの地政学的世界観を地図化したりして、示してきたわけです。

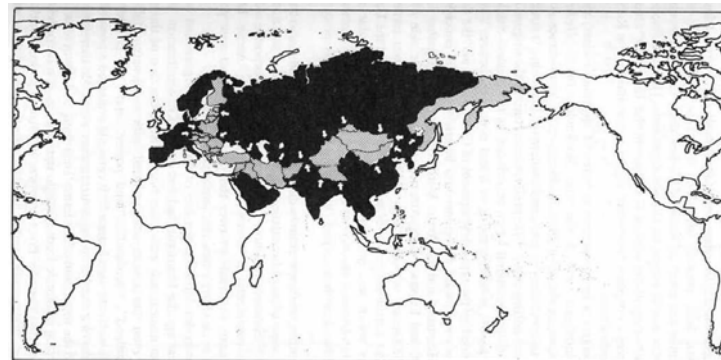


図5 スパイクマンの地政学的世界観 (1944年)  
資料：Parker, p.125.

## 日本の地政学の展開

こういった欧米諸国の地政学の影響のもとに、日本の地政学も展開していくことになります。

日本の地政学を考える上で少し語っておかなければならないのは、帝国日本の拡大過程と地理学が制度化された時期との関係です。日本は19世紀末に台湾を獲得した後、南樺太や朝鮮などを獲得していきます。

しかし、その時期の日本の地理学は、講座こそ1907年に京都帝大に、1911年に東京帝大に設けられていたのですが、当初は毎年1人か2人の卒業生が出るかどうかという、ほとんど専攻者のいない教室でありまして、ようやく1920年代くらいから卒業生が増えてきた、という状況でした。

それに伴って、京都の地球学団という学会や、いまもある東大を中心とする日本地理学会などが20年代半ばにようやくできてきて、論文を発表する専門誌を獲得し、学者の再生産体制も整えられていきました。

30年代・40年代と進む中で戦争に突入していくわけですが、地理学としては、ようやく人が再生産されて、「さて、地位の低い状態である地理学をどうにかしなければ」というところに戦争がやってきたというわけです。ですので、地理学者の中には、戦争にかかわるチャンスを与えてくれるということで、地政学は極めて魅力的な知識として映っていたようです。

そういうこともあって、特に日中戦争が始まった後は、日本の地理学者全員ではありませんが、多くの著名な方が地政学のほうに向かっていくことになります。

という事情を説明しておいた上で、レジュメに戻ります。

地政学が日本に輸入・紹介され始めたのは1920年代半ばの話です。後に日本主義的な思想に傾倒する政治学者の藤澤親雄(1893-1962)という人物が、1925年にチェレーンの国家学説を紹介したことに始まります。

レジュメの3～7ページにかけて、戦前の日本で発表された「地政学関連文献リスト」を載せておきました。これはまだ作成中で完全なリストではなく、恐らくこの1.5～2倍くらいの文献があるのではないかと思います。その最初に藤澤親雄の「ルドルフ・チェレーンの国家に関する学説」という『国際法外交雑誌』の論文<sup>12</sup>が載っています。

ここから始まるわけですが、その同じ年に、地理学からは飯本信之(1895-1989)という人物が、その1年前くらいにアメリカで可決・成立する排日移民法との関連で、地政学に言及しています<sup>13</sup>。「地政学」という言葉を日本で初めて用いたのは、恐らく飯本だと思われます。しかしその後、訳語はすぐには定まらず、いまでこそ「地政学」「地政学」と言っていますが、当初は「地理政治学」とか、「地政治学」とか、「ゲオポリティク」とそのままだという人もいるし、「地理政策学」と言う人もいれば、和辻哲郎は「国土学」と言ったり、いろいろな人がいろいろな訳語をつくっていました。

さて、飯本はどういうことを論じたかということ、先ほどから言っている生存圏とか生存空間、レーベンスraumをめぐって人種間で争いが起きている。そういう問題として、排

日移民法の問題をとらえられないかと彼は主張します。

彼は、チェレーンの定義を引きつつ、地政学を「政治的力と空間との関係を研究する学問」であるとか、「地理的有機体、すなわち空間における現象としての国家に関する学問」とみなしていました。

彼は、その後ずっと地政学に関する著作を発表していくことになりますが、28年に『地理学評論』に発表した「所謂地政学の概念」<sup>14</sup>という論文の中で、ハウスホーファーを引用しつつ、「地政学とは自然的生活空間における政治的生活体をその地的羈束性と歴史的運動による制限との点から理解せんとする科学である」と定義したわけです。

地理的決定論的な土地の条件の制約と、その土地にどういった歴史的経過があったかという、その2つの側面から見ていこうということですが、だからこそ「地理と歴史と政治学の3つの学問が交わるところに地政学があるんだ」ということを述べるわけです。

彼は、後に『政治地理学』、『政治地理学研究』などを刊行し<sup>15</sup>、日本の地政学界で重要な人物となっていきます。1941年末に日本地政学協会<sup>16</sup>ができたときには、その常務理事という、実質的にはトップの地位に就任するわけでありました。

しかし、すでに1927年には、地理学者の佐々木彦一郎（1909-1936）という人物が、次のように地政学に難色を示していました。「私見をもってすれば、この人たちのものの考え方には、ともすれば土地と政治との間に直ちに因果関係を結びつけんとする傾向があって、両者の間に必然に入るべき経済地理的見地よりする過程を飛躍しているので、論理的錯覚誤謬をおかすのではなからうかと思われる」ということが、論文「ゲオポリテークとエコノミック・ジオグラフィ」<sup>17</sup>に書いてあります。

こういう批判は、実は経済地理などをやっている人たちからは当然起こるべき批判でありまして、すぐ後で触れるマルクス主義の立場からの批判も、だいたいこういったところからなされています。

しかし、石橋五郎（1877-1946）という京都帝大の教授は、地理学と切り離せない重要な分野として地政学をみなしていました。「地政学は政治的生活体とその生活を営むに当たり、地との交渉ならびに史的動力の如何を考究せんとするもの」と書いています。

多分これは先ほどの飯本の文章と出どころは一緒ですが、何か翻訳の言葉が微妙に違ってきますね。こういった形で、地政学の文章はだいたいドイツ語からの翻訳が多いのですが、論者によって翻訳語が随分と異なる場合があります、すごくわかりづらい印象を受けるわけです。

それはともかくとして、石橋は、この分野は今後やっていかなければならない分野である。地理学者というのは「實際上における国運に貢献するようなこと」を、地政学を通してやらねばならないのだ、ということを30年の時点で述べています<sup>18</sup>。

しかし、石橋がこういうことを言ったところで、日中戦争が始まるまでは、実は地政学はあまり盛んにはやられていませんでした。むしろ佐々木彦一郎とか、次に出てくるマルクス主義の立場の批判が目立ちます。経済地理学者の川西正鑑（1897-不明）は、ウィットフォージェル（Karl August Wittfogel, 1896-1988）の論文の翻訳・紹介をしつつ<sup>19</sup>、素

朴な地理的決定論で、「国家有機体説の亡霊が漂っている」とか、先ほどの佐々木みたいな形で、「土地と政治を直ちに結びつけようとする。経済地理的な見地からすると、その中間項目が抜けているずさんな理論に過ぎない」ということで、地政学の不完全性というか非科学的な部分をあげつらうというのが 30 年代半ばまでの状況であったわけです。

恐らく最もすぐれた批判である小原敬士（1903-1972）の『社会地理学の基礎問題』は、もともとは横浜市立横浜商業専門学校の紀要に発表された論文を集めたものですが、それも同様の議論をしています<sup>20</sup>。

しかし、こうして「不完全なものである」と批判されていたにもかかわらず、日中戦争が始まると、地政学はなぜか重要な学問分野として立ち上がってくるようになりました。

それはいろいろな理由があるわけですが、特に「レーベンスraum（生存空間）」という概念が重要で、この概念を使って、日本が東アジアだけではなくて、東南アジアなどの占領地を獲得していくことを正当化する理論として登場してくるわけです。

というのも、東アジアだけであれば、ドイツ地政学を借りてきて議論をしなくても、それ以前からある日本の伝統的な思想で、日本と中国とか朝鮮とかの一体性はどうにか説明し得る話だと思われるわけですが、日中戦争以後、日本の目の前に開けてきた、いわゆる「南方」とか「南洋」と言ってもいいかもしれませんが、あの空間を日本と一緒にのものだ、一体性のあるものだと説明しようとする、どうもそれ以前の思想ではなかなか説明しづらくなってきて、それで、どうにか説明できる理論としてドイツ地政学の議論が使われることになったわけです。

ですので、「不完全な地政学」なんて批判している場合ではなくなってきて、その使えるところ、特に「生存空間」とか、ハウスホーファーが『太平洋地政学』の中で展開してくれている日本に都合のよい議論などを、どうにか導入しようということになります。

そして、「ハウスホーファーブーム」と言ってもいいような翻訳ブームがやって来ます。**表 2** はハウスホーファーの翻訳文献のリストを示したのですが、ハウスホーファー、マウル、オブスト、ラウテンザッハの 4 人で書いた「地政学概念の史的発展に就いて」という論文の一部が阿部市五郎（1897-1988）によって 1932 年に翻訳されたことを除けば、いまの僕の調査では、1939 年 11 月の「地政学基底」という論文の翻訳が、恐らくハウスホーファーの著作の初の翻訳だったのではないかと。それ以前は、地政学について紹介する論文の中でハウスホーファーの著作を引用することは当然さんざん行われてきたわけですが、ハウスホーファーの著作そのものをしっかり訳すことは、どうも行われていないようなんです。

しかし、それ以降は、逆に次から次にハウスホーファーの翻訳が出されることになります。40 年に入りますと、『太平洋地政学』という 24 年の本が、江沢譲爾と日本青年外交協会研究部により翻訳されました。ただし、軍令部からの委嘱を受けて江沢が訳した『太平洋の地政学』は公刊されていません。

そのほか、『現代英国論』の一部とか、41 年には『朝日新聞』に載ったり、あとは『地政学雑誌』に載った「インドパシフィック圏に関する報告」をまとめた『大東亜地政治



学』など、いろいろな形でハウスホーファーの翻訳が次から次に出版されていくことになります。

表 2 ハウスホーファーの翻訳文献リスト

- |   |
|---|
| (1) 阿部市五郎抄訳「地政学概念の史的発展に就いて」『地理教育』15 卷 3 号～5 号、1931 年 12 月～1932 年 2 月            |
| (2) 佐藤弘・江澤譲爾訳「地政学的基底」二荒芳徳編纂代表『新独逸国家大系第 3 卷 政治篇 3 国法的基礎・国防軍』日本評論社、1939 年 11 月    |
| (3) 江沢譲爾訳『太平洋の地政学—地理及歴史の交互関係についての研究—』軍令部、1940 年 7 月                             |
| (4) 日本青年外交協会研究部（服田彰三）訳『太平洋地政治学—地理歴史相互関係の研究—（上巻）（下巻）』日本青年外交協会出版部、1940 年 8 月・11 月 |
| (5) 木暮浪夫訳「地政学的・戦略的変遷より見たる英国の地形—日本との比較—」ハムブルグ世界経済研究所編『現代英国論』刀江書院、1940 年 11 月     |
| (6) 訳者不明「東西新秩序の建設使命」朝日新聞 1941 年 1 月 5 日   |
| (7) 阿部市五郎・渡邊義晴・玉城肇訳『地政治学の基礎理論』科学主義工業社、1941 年 2 月                                |
| (8) 石島栄・木村太郎訳編『大東亜地政治学』投資経済社出版部、1941 年 3 月                                      |
| (9) 土方定一・坂本徳松訳『地政治学入門（新世代叢書 12）』育生社、1941 年 4 月                                  |
| (10) 訳者不明「欧亜大陸の地政学的考察」『国際経済研究』3 卷 1 号、1942 年 1 月                                |
| (11) 太平洋協会編訳（佐藤莊一郎訳）『太平洋地政学』岩波書店、1942 年 2 月                                     |
| (12) 佐々木能理男訳「日本の新生」『新文化』12 卷 4 号、1942 年 4 月                                     |
| (13) 若井林一訳『生命圏と世界観』博文館、1942 年 7 月   |
| (14) 小林良正訳『大陸ブロック論』太平洋協会、1942 年 8 月   |
| (15) 大野信三訳「民族の生活空間」『地政学』1 卷 8 号～9 号、1942 年 8～9 月                                |
| (16) 若井林一訳『大日本（上巻）』洛陽書院、1942 年 12 月   |
| (17) 佐々木能理男訳『日本』第一書房、1943 年 2 月   |
| (18) 窪井義道訳『大陸政治と海洋政治』大鵬社、1943 年 4 月   |
| (19) 梅澤新二訳『日本の国家建設（上巻）』龍吟社、1943 年 12 月  |

他の人の著作も訳されていないわけではないのですが、特に 39 年以降は、ハウスホーファーのものを中心として、日本ではドイツ地政学を受容していくことになるわけです。

地理学者たちは、先ほどから言っているように、帝国日本の拡大を先導するというよりも、むしろ後追いする形で 20 年代半ばにようやく地理学が制度化した、という事情もあって、地図作製という営為とは切り離された状態にありました。地図作製は主に参謀本部陸地測量部がやっていますので、「地理学者は何をすれば？」と考えているうちに 30 年代に突入するわけですが、そこはもう戦争の時代であったわけです。

そして、戦局の進展も相まって、「地政学に乗っかれば何かしら発言ができる」というチャンスが地理学者に到来したこともあって、みんなとは言いませんが、多くの地理学者が地政学に手を出していくことになるわけです。

## 小牧実繁と高嶋辰彦

そうした例を2つ紹介します。1つは、僕がいままで研究してきた京都帝大のグループです。これは、きょうお配りした抜刷や KURENAI に公開しているものを読んでいただければいいわけですが、簡単に紹介しておきます。

図6は、38年の京大の地理学談話会の写真ですが、前列左から2人目の人物が小牧実繁で、当時40歳の教授でした。中列左端の室賀信夫（1907-1982）は31歳、当時は講師だったと思いますが、後に助教授になり、地政学でかなり重要な役割を果たしています。あと何人か、地政学にかかわった人物がここに写り込んでいます。

この小牧のもとに、当時、陸軍の参謀本部に勤めていた高嶋辰彦（1897-1978）という人物から、地政学研究—高嶋日記<sup>21</sup>（表3）には「政治地理学」と書いてありますが—の依頼が舞い込みます。1938年11月1日のことでした。

表3 高嶋日記に見られる総合地理研究会に関する記述（1938年～1939年）

年月日（曜日）	記述事項
1938年11月1日（火）	青山、京大の小牧実繁博士来訪。昼食後訖語る。真面目にて静かなる人物。政治地理学につき依頼す。
1938年11月17日（木）	午前京大にて桜井、肥田両大佐を打合せ、次で宮崎、羽田、中村等諸教授を歴訪す。…午後四時訖総合地理研究会（小牧博士主宰）に臨席。
1938年12月24日（土）	九時青山、小牧博士以下参集せる。総合地理研究会員に対し余一場の挨拶をなし後世界情勢を説明す。昼食後も続け午後二時より研究に移る。各種の意見あり。とくに室賀信夫氏の所述異色あり。軍部に対する直言を憚らず。余却って望みを同氏に属す。結局歴史地理より看手することとなれり。〔三時まで〕…午後六時より軍人会館にて総合地理研究会員会食。十時帰宅す。
1939年3月8日（水）	〔間野少佐と共に〕午後一時より楽友会館にて総合地理研究会に臨む、皆熱心、考え方もわれらに近づく、夕食を会食
1939年5月14日（日）	〔京都〕十時より四時半まで皇戦地誌研究会に開く
1939年9月24日（日）	九時半鈴木大將を京都駅に迎う。16D 長石原莞爾中将も在り。丸物にて会長に総合地理の一同を紹介し、丸物展覧会を一覧す、正午瓢亭にて会長、理事長、田中商工会議所会頭榎並同神戸会頭、竹上副会頭、大里支配人、伊■少佐等を師団にて招待、師団側は福栄少将、大橋中尉なり、会食後中岡、福栄、



図6 1938年11月の地理学談話会



	高嶋、大橋の四人にて会談、次で中岡理事長を総合地理研究会場に案内す。
1939 年 11 月 23 日 (木)	新嘗祭…九時吉田の総合地理研、午後九時迄勉強す。同会にも光明を認めたり。

こうしてその後、地政学の研究会が始まっていきます。38 年 11 月というのは、小牧が『京都帝国大学新聞』の中で初めて「日本地政学を今後やっていくんだ」ということを宣言<sup>22</sup>した時期ですが、実はその前に、高嶋から政治地理学研究の依頼が来ていたんですね。高嶋日記には、東京の青山に集まったり、京大付近に借りていた民家を舞台として、総合地理研究会（通称「吉田の会」）という名前で研究会をやっていたことが記されています。

いろいろ書いてありますが、1939 年 11 月 23 日には、京大の周辺を吉田と言いますが、吉田の総合地理研究会で午後 9 時まで勉強し、「同会にも光明を認めたり」と記されています。その日の写真が図 7 で、ある地理学の先生から入手したものです。後ろに写っているのは民家の窓だと思いますが、前列中央に高嶋辰彦が座っていきまして、その左に小牧実繁、室賀信夫、高嶋の右に間野俊夫少佐という人物がいます。残りは地理学者ですね。



図 7 1939 年 11 月の総合地理研究会

中列中央の川上健三（1909-1995）という、戦後、外務省に勤め竹島問題などについて研究した人物<sup>23</sup>が、高嶋と小牧・室賀の間を取り持つ重要な役割を果たしました。彼は室賀と同じ年に京大を卒業した地理学者です。

小牧の活動は、京大の中だけではととまらず、例えば、「満洲国」の新京（長春）にあった建国大学の兼任講師も務めていたので、そこを訪ねて地政学の講義を行ったりもしています。図 8 に写っている人は全部、小牧の後輩に当たる地理学者ですが、「満洲国」旗と日本国旗が並んでいるおもしろい写真です。

小牧たちの活動は主に 2 つあって、一つは



図 8 1940 年 9 月の建国大学の地理学教員と小牧実繁

陸軍の戦略研究の一端を担うことでした。要するに、参謀本部の外郭団体から「今度、ベトナムのほうに侵攻するけれど、ベトナムってどういう地政学的位置づけですか」みたいな課題が与えられて、基本的には既存の文献を外国語力などを生かして読み込み、地政学な考察を加えたものをレポートとしてまとめて送る、という仕事です。

もう一つは、**図 9** は座談会の様子ですが、こういった形で地政学的な宣伝活動することでした。一番奥に小牧がいて、室賀がいて、という図ですが、京都の岡崎にある無鄰菴というところで、『週刊朝日』の座談会に臨んだ様子です。



図 9 『週刊朝日』編集部主催の座談会に臨む総合地理研究会のメンバー（1941 年 11 月）

資料：小牧実繁ほか「（座談会）大東亜に於ける白禍を暴く」『週刊朝日』12 月 7 日号、1941 年、8 頁。

小牧は『日本地政学宣言』、『日本地政学』、『大東亜地政学新論』など多数の本を出版して<sup>24</sup>、しかも部数がかかなり出ていることが明らかになっています。こういう形で、思想戦の中での宣伝活動を行うことが小牧たちの地政学のもう一つの柱でした。

**表 4** は小牧の著作の年次別・種類別の分類です。41～43 年の 3 年間に集中しています。現物を確かめられていないものが 44 年にあるのですが、そういうのを含めれば多分 200 以上はあるのですね。

表 4 小牧実繁の著作の年次別・種類別分類（1938 年～1945 年）

	1938	1939	1940	1941	1942	1943	1944	1945	合計
著書	1	0	2	0	6	1	3	1	14
雑誌	0	0	3	10	38	27	5	5	88
新聞	1	0	1	4	20	13	20	6	65
その他	0	0	0	4	2	4	2	0	12
合計	2	0	6	18	66	45	30	12	179

当時、アジアは、そもそも独立国なんてものはほぼなくて、タイくらいだったわけです。タイは、いわゆる緩衝国という形で独立が許されていたに過ぎません。英領と仏領があるわけですが、その間に置かれているがゆえに生き延びているような状態です。あとはせいぜい中華民国とか、日本くらいしか独立国はないという、ほぼ植民地化された状態だったわけです。

この植民地化されきったアジアがどうしてこうなったのかを分析するのが、彼らの地政学がやった大きな仕事になります。



図 10 は、まさにそういう様子が描かれているものです。『日本教育』誌という、当時の教育界ではわりと重要な役割を果たしたといわれる雑誌の一つですが、毎号こういう形で裏表紙に地図を載せ、中に解説を書く、という仕事を彼らはやっていました。

もう一つは、図 11 です。彼らは、ハウスホーファーやマッキンダーみたいに、あまりたくさんの地図を残していないのが残念ですが、これは彼らの地政学的世界観がわかる数少ない地図です。

この「南方への展開」というのは、当時、日本は一応ソ連と同盟を結んでいたこともあって、北はあまり視野に入っていなかったんですね。大東亜共栄圏もこっちのほうですから、南へ南へというルートです。とにかく大東亜共栄圏を獲得するのは当然ですが、さらにそこを過ぎて、オーストラリアへの進撃とか、あるいはインド洋を超えた東アフリカも

彼らの視野に入っていたということで、欧米の地政学とは少し違った形で世界を見ていたであろうことがよくわかる図になっています。

ところで、小牧は思想戦を遂行する中で、ちょっと怪しげな組織と関係を持っていたんですね。きょうお配りした抜刷にも書いているのですが、戦争文化研究所といわれる機関とか、スメラ学塾という、何をしていたかよくわからないようなところとも組んでいました。

それはどういうネットワークだったのかというと、先ほどの高嶋辰彦という軍人を中心に築かれたもので、情報局にいた鈴木庫三（1894-1964）も関係しているし、小島威彦（1903-1996）や仲小路彰（1901-1984）といった連中ともつるんでいた。要は、中には極右的な思想を持った人たちを含んだ宣伝、思想戦遂行のためのネットワークという形ですが、当時はかなり大きな影響力を持っていたようです。小牧はこのネットワークに参加

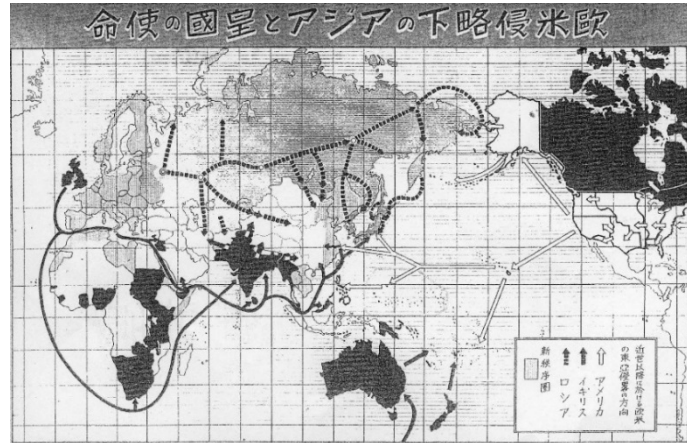


図 10 『日本教育』誌に掲載された地政学的解説図  
資料：『日本教育』1月号、1942年、裏表紙。

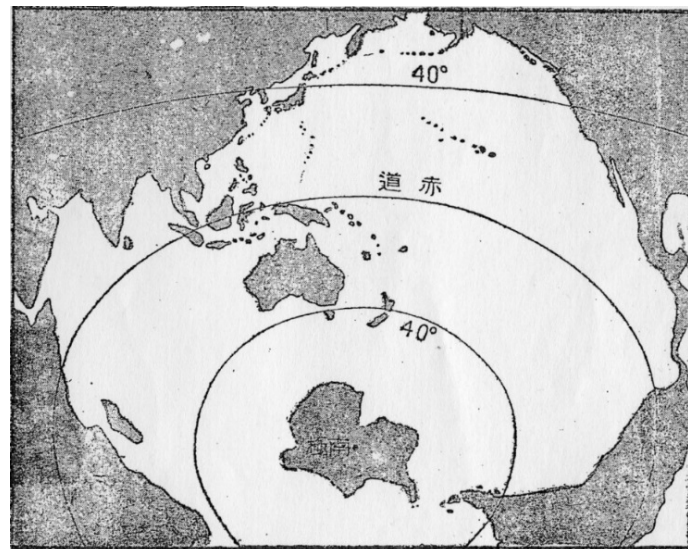


図 11 総合地理研究会の地政学的世界観  
資料：小牧実繁『世界新秩序建設と地政学』旺文社、1944年、143頁

することによって、先ほどのような数多くの雑誌に論文を発表することができたと考えられます。

しかし、結果として、これは戦後の没書指定の目録<sup>25</sup>に出てくるのですが、小牧実繁 7 冊、室賀信夫 3 冊といった形で、彼らが出したプロパガンダ、地政学の宣伝的な著作はほとんど、ことごとくと言っていいと思いますが、没書指定を受けています。これはかなり異常な事態と言ってよいでしょう。

### 江沢譲爾と高木惣吉

もう一つの例として、**江沢譲爾**（1907-1975）という人物について少し触れないといけません。彼は、海軍の支援を受けて 1941 年末にできた日本地政学協会でも活躍していたのですが、それとは別に、海軍調査課長の**高木惣吉**（1893-1979）のブレントラストの 1 人として活動していました<sup>26</sup>。**図 12** は 41 年 4 月に横須賀鎮守府で撮られたものですが、後列左端に江沢がいるんですね。矢部貞治（1902-1967）もどこかにいるはずですが、それ以外にもけっこう著名な学者がいろいろ入っている中に江沢も入っていました。

高木は、39 年 2 月に西田幾多郎（1870-1945）に初対面し、9 月に西田邸に海軍への協力を依頼しに行き、田辺元（1885-1962）や高山岩男（1905-1993）らを紹介されています。そして、39 年 4 月に海軍調査課長に就任した高木は、40 年 4 月にブレーンの人選を始めて、同年 11 月にブレントラストを組織します。思想懇談会には和辻哲郎（1889-1960）がいるし、外交懇談会には神川彦松（1889-1988）や松下正寿（1901-1986）、政治懇談会には矢部、総合研究会に高山・矢部・松下が入っていて、あとは別系統で直接連絡をとる囑託に蠟山政道（1895-1980）らがいるとか、ともかく相当著名な人たちがいるわけですが、その中に江沢譲爾という、経済地理学者とも地政学者とも言っている人物が 1 人入っていたわけです。

江沢は、1930 年 3 月に東京商科大を卒業した後、36 年 4 月に東京商科大予科の講師になります（41 年 4 月に教授）。担当はドイツ語で、どうも専門の経済地理学を教えていたわけではないようです。海軍調査課のブレントラストに参加した後は、41 年に「東亜共栄圏の統一性についての地政学的考察」、「共栄圏における産業の配置」という報告書<sup>27</sup>を書いています。

また、41 年の日本地政学協会の設立にかかわり、評議員の 1 人となりました。そして、『ハウスホーフ



図 12 横須賀鎮守府を訪れたブレントラストのメンバー（1941 年 4 月）

資料：藤岡泰周『海軍少将高木惣吉—海軍省調査課と民間人頭脳集団—』光人社、1986 年、巻頭。

アーの太平洋地政学』、『地政学研究』、『地政学概論』など、地政学関連の著書や論文を多数発表しています<sup>28</sup>。小牧たちのように組織立った活動ではなくて1人でやっていたみたいですが、そういった活動をしたせいで公職追放を受けて、戦後は東京商科大を追い出されるわけですが、その後、神奈川大学や専修大学に勤めたという人物です。69年には経済地理学会会長にも選ばれています。

江沢はハウスホーファーの太平洋地政学を翻訳し、解説本も書いたことから分かるように、ドイツ地政学によく通じていました。小牧は、ドイツ地政学というのは、帝国主義とかナチス・ドイツの発想に基づいたものであると反発して、日本独自の地政学を建設しようと動いていくわけです。しかし、江沢はそうではなくて、ドイツの地政学に至らない点があることは認めていて、それをしっかり吟味しようとはするけれど、あくまでそれに則った形で、科学としての地政学を確立しようと非常に苦心した人物であります。だから、小牧とはちょっとタイプが違うわけです。

いわば小原敬士などのマルクス主義者たちから地政学はすでに根本的に批判されていたわけなので、その欠陥はとっくに見えていた。その上で「さてどうするか」となったとき、日本独自の「皇道」という概念を持ち出してきて、それに基づき日本独自の地政学をつくろうとした小牧、ないしはドイツ地政学の欠陥を知り抜いた上で、そこからさらにどうにか発展させようとした江沢の2人くらいが、ある意味マルクス主義者たちの批判にこたえていたのかな、という見方もできるかと思います。

## 国土計画と地政学

戦中の地政学に関するこれまでの研究を振り返ると、思想的な側面の研究はだいぶ進んでいるような気もしますが、軍とどのようにかかわったか、どんな宣伝活動を展開したかといった実践的な側面については、まだまだわかっていないところがあります。今回こうして「地政学関連文献リスト」をつくってみたわけですが、こんなリストも多分いままで発表されたことはないんですね。調べればわかることですから。

きょうお話しできなかったのですが、実は地理学者以外に政治学者や経済学者たちがこの地政学の議論にかなり参加し、かつ、戦中には軍と関係したり、あるいはプロパガンダというか宣伝活動を展開しているんです。

しかし、そういったことについては、どうも明らかにされないまま放っておかれている感があります。きょうつくってきた文献リスト、多分あと2倍くらいはあるのですが、それらの文献が出て消えていったのは一体どういうことだったのかというのは、もう少し吟味する必要があるって、いま僕はそれを研究しているということです。

というわけで、結局のところ、国土計画に関してはあまり話せないわけですが、川上さんがお書きになった本<sup>29</sup>を読んでもみると、どうも地政学は吉田秀夫（1906-1953）とかの考え方に近いわけですね。上から国土計画をやっていこう、という流れにつながっている……。

司会 まさに戦前はドイツ流の国土計画でしたから、いまハウスホーファーとかという話



が反映しているんだと思うんですね。

柴田 幾つか読んでみると、どうも戦中の地政学者は「国土計画と地政学は似ているけれど違う。だから、それをごっちゃにするべきじゃない」という議論もしていたりするけれど、一方で、ラウムオルドヌング (**Raumordnung**) ですか、いまは「国土整備」とか「空間編成」と訳すのですが、それを「国土計画」と訳してしまって、地政学者たち、経済地理学者たちが、国土計画の議論に強引に参加しようという節もあって、『国土計画』という雑誌には地理学者による論文が多数掲載されていますね。だから、それをどうとらえたらいいのかというのは、僕自身もよくわからなくなっているんです。

それに関しては、実は僕がやるまでもなく、一つは、いま在籍している人文科学研究所の所長である山室信一 (1951-) が、岩波の『「帝国」日本の学知』の第8巻に、「国民帝国・日本の形成と空間知」という長大な論文<sup>30</sup>を書いていて、その中に国土計画の議論が出てきます。

司会 それは、この文献リストに入ってはいませんか。

柴田 これは戦前のものだけですので、入っていません。それを見ていただければ、国土計画については僕が解説するまでもなく書いているので、これ以上、僕がつけ加えることはないと思います。お話しなかったわけです。

やはり最初に申し上げたように、あまりご趣旨にこたえられていないかと思いますが、戦前戦中の欧米諸国及び日本における地政学の動向はだいたいこういう形だと思います。

司会 どうもありがとうございました (拍手)。

### 質疑応答、意見交換

司会 それでは、質疑応答あるいは意見交換をしたいと思います。私からすみません。

問題意識としては、最初に申し上げたように国土計画と地政学の関係で、きょうは新しい文献などを教えていただいて、また山室先生のものも読んでみたいと思います。

私も縷々調べてみると、戦前の国土計画は、近衛内閣のときの基本国策要綱の中に「国土開発計画をつくる」という話と同時に、「大東亜共栄圏」とは書いてないのですが、要するに東亜一体なもの、「日満支を通ずる云々」という形で、そういうものを意識したものとして書かれている。

かつ、ドイツ語のにおいがぷんぷんするわけで、まさにアウタルキー、レーベンスラウムの日本語訳が入っているわけですね。ですから、1935年の時点で、ドイツ流の国土計画でいこうとしていたんだろうと思うんです。

それで、私がわからなかったことが、きょうの話とか、あるいは先生の手記を読んでいると、読んでいてちょっとずつわかってきたので、「こういう認識でいいのか？」という確認でもあるのですが……。

大東亜共栄圏という概念と、あるいは地政学との関係で、むしろ後追いだとおっしゃっていたのですが、まさに国土計画もそうみたいなんですね。国土計画における大東亜共栄圏の位置づけとか、もともと基本国策要綱に「日満支を通じた云々」と書いてあるので、



国土計画はそういうものだという意識はあるけれど、概念としては「大東亜共栄圏」が先にあって、後づけで「そのための国土計画がどうあるべきか」みたいな話になっているのかなと。

その大東亜共栄圏といったとき、もともと松岡洋右が言い出したと思うのですが、地政学の世界で有名人としては、竹内啓一（1932-2005）が整理するところ<sup>31</sup>の東と西の2つのグループの、西の小牧実繁の話に先に着目して調べていくのですが、国土計画あるいは大東亜共栄圏そのものとの関係はあまりないんですね。僕は、てっきり小牧実繁が大東亜共栄圏の主唱者かと思ったのですが、全然そうじゃないことがやっとわかってきて、かなり遠回りしてしまったのですが、「そういうことですよ？」という確認がまず一つです。

柴田 そうですね。

司会 それから、先ほどおっしゃったように、いろいろな雑誌の系統で国土計画をずっと一貫して書いているのは、最後に出てきた江沢譲爾なんですよ。江沢譲爾も軍と関係があるという感じで、片一方で「吉田の会」の話も書かれていたのですが、恐らく先ほどの文脈から言うと、小牧実繁は、「吉田の会」を通じて軍部と関係して、プロパガンダ、あるいはコマーシャル、PRは一生懸命やっていたと思いますが、政府に直接影響力を持っていたかという、あまりそういうことはなさそうなんですね。

柴田 恐らくないですね。

司会 そういう中で公職追放されているものだから、てっきり大東亜共栄圏を担いだという意味かなと思ったのですが、必ずしもそうじゃないんですね。

柴田 はい。公職追放に関しては……。

司会 全然別のあれで、「何とかの会に所属していたから」という感じですね。

柴田 そうです。小牧実繁について言えば、大日本言論報国会の理事をやっていたから、公職追放されたわけです。地政学的な活動をしていたから公職追放されたということではありません。あくまで直接的な理由としては、ということですが……。

司会 江沢譲爾が公職追放されたのはどういう理由ですか。

柴田 江沢に関しては明確にわからないんですね。もしかしたら、何かしらの会の理事とかをやっていたからじゃないかという可能性はあります。でも、日本地政学協会ではないんですね。例えば、きょう出てきた飯本信之は、かなり重要な役を果たしていたにもかかわらず逃れていますので、難しいんですね。

司会 大東亜共栄圏は、陸軍の軍人の岩畔豪雄（1897-1970）がもっとも強力な主張者だったのではないかとされているが、それは先ほどの「吉田の会」と関係があるのかどうか、わからないのですが。

柴田 岩畔とは関係ありますね。

司会 あるんですか。

柴田 ありますね。ただ、直接ではないと思います。彼は、昭和通商という国策会社、アヘンを中国で売りさばいたり、武器の売買をしていた会社から資金を得ていました。この

かなり大規模な昭和通商と、小牧たちのかかわっていた参謀本部の外郭団体はつながっているはずなので……。

司会 それで関係あるだろう、という推理になるわけですね。

柴田 あるとは思いますが、小牧と岩畔が直接会ったかどうかはわかりません。

司会 要するに、もともとは大東亜共栄圏の話と国土計画の関係からずっと入ったのですが、最初に総括したように、地政学者から発したものでないのと同じように、国土計画の立案者が大東亜共栄圏を考えたわけではなくて、先に政治的な要請の松岡洋右とか、あるいは岩畔豪雄の発想が後づけでくっついてきているという、国土計画における大東亜共栄圏の扱いについてはそういうことなんですよ。

柴田 はい。

司会 ちょっと細かい話を先にしてしまいましたが、何かご質問とかあればどうぞ。

質問 いまのに関連して、このレジュメにもあるのですが、陸軍と京都帝大グループ、それと海軍と日本地政学協会という対立軸というか、多少発想の違いをされていて、そして江沢譲爾の話が出てきたのですが、江沢譲爾と海軍と日本地政学協会の考え方の差とかは何かありそうですか。小牧実繁と陸軍というか、もともと地政学の名残で言えば、陸戦というかそちら側の議論と、海の話を中心にするという、そのあたりの考え方の相違が何かあるのか。

それから、「大東亜共栄圏」というのが、いわゆる陸の世界なのか、それとも陸を含めた海の世界の話として組み立てられたのか、その辺はわかりづらいところがあったのですが、どんな感じをお持ちですか。

柴田 そこは難しいところでありまして、海軍中将の上田良武（1878-1957）を担いで日本地政学協会の会長に就任してもらって、どうにか日本地政学協会ができたというのはほぼ間違いないのですが、その日本地政学協会に参加し、雑誌『地政学』に論文を書いていた人達が、海軍の考えていることに沿ったようなことを言っているのかというと、結構ばらばらなことを言っていて、「何のまとまりもない集まりなんじゃないか」という評価さえある協会なんです。何か「地政学をやるぞ」とかと言っているわりには、「地政学はまだまだ不完全だ」ということもずっと言っているし、何をしたかったのかは、いまになってはよくわからない協会です。

ですので、日本地政学協会は海軍とのつながりはあったけれど、海軍の御用機関だったかどうかと言われると、そうとは言い切れない部分があります。

そういう意味では、そういう表面的なつながりに過ぎなかった海軍と日本地政学協会というよりも、当時の地政学者の中では切れた人物である江沢と、海軍調査課の高木というつながりのほうが、恐らく意味があったんじゃないかと思っています。

それで、いま海軍省資料に残されている江沢が書いた報告書が、どれだけ海軍の意向ないしは方針に沿ったものなのかを調査してしまして、それがわかれば、また違った答え方ができるかもしれません。

実は、江沢と軍とのかかわりは、まだだれも探究していないんです。ブレーントラスト

の研究はあるのですが、矢部貞治など有名どころに議論が集中してしまっていて、江沢が入っていることは、だれも気づいてさえいないというか、名前はワープロで打ってくれるけれど、だれも江沢について掘り下げようとしないので、いまここをやりようと思っていました、またわかったらお答えできるかもしれません。

質問 文献リストに、川喜田二郎（1920-2009）、梅棹忠夫（1920-2010）とか、戦後の京都学派に何かつながるようにも思えますが……。たしか本には、戦前に南方方面に調査に行っていたとかと書いてあったようなので、こんなところに出てくるのはちょっと意外な感じもあるのですが、このあたりの関係というか、先生の見られるところはいかがでしょうか？

柴田 川喜田と梅棹は、1939年くらいから京都探検地理学会<sup>32</sup>というのに参加していました。メンバーは、文学部の地理学教室の小牧実繁とその門下生で、川喜田は文学部の地理学教室だったので、そこにつながっているわけです。

あとは理学部の今西錦司（1902-1992）—当時は立場的に無給講師だったそうですが、その今西錦司の周辺にいる、動物学や生物学、生態学などをやっているような人たち—梅棹もその一人です—が集って、探検地理学会というのを京都でやっていました。そもそも梅棹と川喜田はもともと三高の山岳部からのつながりですけど、この会にも参加しているというわけです。

質問 そうすると、川喜田二郎さんは小牧さんのお弟子さんでしょうか？

柴田 そうです。

質問 そうだったんですか。

柴田 当時の教室の方針なので仕方ないかもしれませんが、川喜田は「北部東亜大陸の地政学的考察」という卒業論文<sup>33</sup>を書いています。

司会 探検地理というのは、ある意味で拓殖の先兵みたいなところがあって、「あの地域はどんな資源があるか」とか、そういうことを一生懸命調べていたのですか。

柴田 いやいや、やっていません。

司会 そういうことはやっていないのですか。

柴田 探検地理学会というのは、表面的にそういうことをうたっていたかもしれませんが、基本的には今西錦司がどこかに学術調査をしに行こうという、そのときのある意味で母体となった集団です。南洋調査ではポナペ島に行っているわけですが、あれは今西錦司が率いて、川喜田二郎とか梅棹忠夫とか若手が参加して……。

司会 そういう意味では、目的というよりは、興味があるから行っていた、という感じなんですか。

柴田 いや、多分ポナペ島には大して興味はなかったと思います（笑）。回想を読んでいる限りは、どうも今西は大興安嶺など大陸のほうに行きたかったんですね。実際にポナペ島に行った次の年か、その次の年くらいには大興安嶺に行くわけですが<sup>34</sup>、最終的にはヒマラヤに登りたかったわけです。そういう遠大な目的というか学術探検をするためのトレーニングの場としてポナペ島に行ったんだと、梅棹さん自身が書かれています。今西さん

に訓練してもらった場所がボナペ島であったと。でも、実際は日本が植民地統治をしているからこそ、こんなところで実現した。

司会 何か先兵で調査に行っているのかと思ったら、そうじゃないんですか（笑）。

柴田 恐らく違うと思いますね（笑）。少なくとも彼らの意識の上では。

質問 戦後、小牧とか室賀とかは全然出てくることはなかったのですか。

柴田 いえいえ、そうではなくて……。

質問 滋賀大学の学長。

柴田 先ほどの川喜田と梅棹の「探検と地政学」とか「歴史・地理・探検」<sup>35</sup>というのは、地政学を称揚するというか、小牧流の地政学を称えるのではなくて、彼らは学生くらいの身分だったけれど、むしろ「こんな地政学はだめだ」と徹底的に批判しているんです。

小牧さんたちは、歴史地理学がもともとの専門だということもあって、歴史的な資料や外国語文献に基づいて地政学的考察を行うのですが、「そういうものだけ見ていたのではだめだ。自分たちみたいに探検のような形でフィールドワークをしていくことによって、新たな地理的な知識を得ることができるし、それに基づいた知識こそが本当は重要だ。小牧さんたちはせいぜい文献資料を使って調べているだけではないか」ということを学生の立場で批判するわけです。

そして、室賀と小牧に関しては、小牧は公職追放される前に京都帝大を1945年12月に辞めまして、続いて室賀など部下もみんな辞めます。その後、小牧は京大の周辺で古本屋を開いていたそうです。本当なんですよ（笑）。

その後、先ほど言った大日本言論報国会という、戦中の思想戦遂行の機関に入って理事になっていたせいで、自動的に公職追放されます。それは1947年くらいの話だった気がします。

実は、それが悲劇的な話なのは、大日本言論報国会の理事ということで小牧もいたし、先ほどちょっと出ていた、哲学の京都学派の高山岩男とか高坂正顕（1900-1969）とかもいたのですが、彼らはむしろ小牧たちのような思想の持ち主からいじめられているというか、除け者にされていたにもかかわらず、理事になっていたということで同時にパージに遭う、ということがありました。

小牧はパージされた後、京阪電鉄に勤めたり、出版社に勤めたりしてしのいで、1952年に滋賀大の教授になり、滋賀大の学長まで務めることになります。もともと滋賀の名家みたいなところの出身だったので、そういうつながりで……。滋賀大というのは、西田直二郎（1886-1964）という京都帝大の国史の同じく公職追放になった人も務めるし、不思議なところなんですね。

室賀信夫は、1943年に京都帝大の助教授に就任するのですが、1年後くらいに若かったけれど病気で、亡くなりほしくないけれど、隠居みたいになってしまいます。すごく体の弱い人だったそうです。

戦後も、どうやって暮らしていたのか、奥さんの家がすごく裕福だったという話です

が、ずっと何の職につくこともなく、京都駅から1つ東の山科駅の近くで隠居生活みたいなことをしつつ、研究を続けていました。

彼はもともと地図史の研究とか、歴史地理学の研究が専門だったのですが、戦後はもっぱら地図史の研究をしています。仏教系の世界図の研究などをやってみて、その分野では国際的な英文ジャーナルに載って、すごい賞をとったりと相当活躍はするけれど、ものをたくさん書いたというよりかは、すごい論文を何本か残したという印象が強いです<sup>36</sup>。最後、何年間かだけ東海大学の教授を務めていたこともあるのですが、それ以外はそういう職につくことなく、地図史の研究をしていたということです。影響を受けた人はすごく多いのですが……。

質問 戦後、京大の人文地理は、やはり小牧系のお弟子さんがやられたのですか？ あるいは、公職追放されたからそうではないのでしょうか？、あまりこんなこと聞くのもなんですけれど。

柴田 それに関しては重要な問題ですけど（笑）。

1938年、小牧実繁は40歳で教授だったわけですが、それよりも下の室賀をはじめ、いろいろな方が地政学にかかわっていきます。というのも、室賀に限らず、当時の若手であり優秀な人たちを、小牧は地政学研究に総合地理研究会という形で動員するんですね。

そして彼は、「室賀君はどこ」とか「〇〇君はあそこ」という形で担当地域を割り振るんです。例えば、米倉二郎（1909-2002）という中国研究を行った人物がいますが、「君は中国」という形で地域を分担させて、その地政学的な地誌の研究をさせます。

さらには卒論も、「外国の地政学的な地誌以外は認めない」と言い出して、それも卒論が優秀なら、そのまま雑誌—「小牧実繁」という名前になる場合もあるのですが（笑）—に発表したり、昭和通商への報告書になったり、いろいろな形で世に発表していくようになります。

それだけに傷跡は深くなってしまいまして、小牧の下にいた、当時ある意味で優秀だった門下生がほとんど地政学にかかわってしまい、戦後しばらく研究生活が立ち行かなかったんですね。

実は、そういう地政学にかかわらなくて済んだ織田武雄（1907-2007）という人物が、戦後、小牧たちがいなくなった地理学教室の助教授に就任することになります。

地理学教室というのは、戦後間もなくは、京大の文学部の中で「こんな教室、要らん、つぶせ」という議論が本当にあったそうで、特に哲学のほうから言われた—ある意味で当たり前だと思いますが（笑）—という状況だったようですが、史学科の先生たちが「いや、人文地理をつぶしたらあかん」ということになって、東洋史の宮崎市定（1901-1995）という人物が兼任の教授で入って、織田武雄を迎えてどうにか生き延びた、ということです。

彼は西洋の古代地理学史とか地図史の研究で大家になっていきます<sup>37</sup>。なので、彼がいたからこそ、今日まで教室が存続できたということになるわけです。

司会 小牧さん自体は、最後はちょっとオカルトっぽくなっていく。さっきもちょっと出



ていたのですが、スメラ学塾の話とか、交友関係も何か変になってきて……。

柴田 おかしくなっていますね。

質問 地政学の科学としての分析手法みたいなのは、いまの国際情勢に使えるのかどうかというのは、どんな感じですか。

質問 それに関連する質問で、例えば、アメリカの政治学者、ユーラシアグループのイアン・ブレマーが書いているのを読むと、何か地政学に見えるのですが、あれはそうなんですかね。

柴田 名乗っておられますか。

質問 ユーラシアグループのイアン・ブレマー (Ian Bremmer、1969-) はリスクコンサルタントで、国際的な企業に対して、各国のリスク……。

司会 アラン・グリーンSPAN (Alan Greenspan、1926-) が「地政学リスク」とかと言いだしたが、あれは別に地政学そのものではなくて、そういう何か政治的な問題が、むしろいろいろな金融政策にも影響する、という言葉遣いで言ったんですよね。

質問 現在、「地政学」という言葉を使っているグループは、ヨーロッパやアメリカにはいるんですか。

柴田 います。むしろ地政学は、英語圏では最近すごく盛んな分野だと思います。日本で「地政学」と聞くと、随分怪しげな雰囲気が出てしまったり、きょうは戦後の話を全然していないのですが一当初は用意していたけれど多くなるので、「ちょっとやめよう」となってしまったのですが（笑）—最近、日本で地政学者と名乗っている人として、奥山真司 (1972-) はご存じですか。

司会 ホームページ<sup>38</sup>を見えていますよ。

柴田 彼は、英語圏で地政学というか戦略学を実際に学んで帰ってきた人で、恐らくすごく豊富な知識を持っているし、翻訳本もたくさん出して<sup>39</sup>、すごく偉いなと思っているのですが、何というか、お書きになるものがちょっと……。翻訳はいいけれど。

司会 あの人は翻訳だけですね。

柴田 何か自分の本は……。

司会 本人が書いている本文は、まさに地政学史<sup>40</sup>ですから、最初にご説明があったような話で……。

柴田 そう、そこまではいいんです。奥山さんに関して言うと、翻訳は読みやすいし、地政学史、きょう僕が最初に紹介したような話も、向こうで学んできた知識を書いているのだから、僕の話なんかよりもよっぽど詳しいのですが、現状の地政学的分析<sup>41</sup>をしたとき、それを読んで納得できるかと言われると……。

司会 かつ、実学として使えるかどうかはよくわからないですね。

柴田 よくわからないんです。だから、日本で地政学となると、奥山さんが名乗っているくらいだと思いますが、現状分析に関しては若干首をかしげざるを得ないし、何か残念だなと僕は思ってしまったんですね。

随分怪しげな雰囲気、つまりは、1980年くらいのキッシンジャーから始まった地政学



ブームのときと同じように、「悪の論理」という言葉を使って地政学について語ろうとするので、何か怪しげな分析にとどまってしまうように見えます。それは日本の話です。

ただ、アメリカに関して言うと一皆さんの所属されている部署は、もしかしたらそういうところかもしれないけれどシンクタンク的な部署に、現状分析をするような、いわゆるリアリストとかといわれるような人たちがいて、彼らがつくり出す地政学的世界観は、僕が理解する範囲では、わりと意味を持っている分析ではないかと思うのですが、本当にどれほどの意味を持っているのかは、ちょっとわからないところですね。

それとまた別に、最初のほうで紹介した政治地理学という分野、特に僕が好きな批判地政学という分野に関しては、すごく研究が盛んです。僕は批判地政学の視点から見た古典地政学の分析に興味があるわけですが、むしろ研究の中心はいままに行われているアメリカの外交政策とか、他の国の政策についての分析、特に言説分析がなされています。それが政治に役立つと言われると、「批判的な立場から見ているだけ」と言えばそうなのですが、おもしろい分野として発達していることは確かですね。

質問 アカデミックジャーナルで、いまおっしゃっていたような批判地政学とか、信頼できるといふか、そういう観点から地政学的なことをやっているものというのと、よく挙がってくるのはどういう雑誌になるのですか。

柴田 『*Political Geography*』誌です。

質問 それ唯一？

柴田 ほかにいろいろな雑誌に載っています。

質問 先生ご自身、当面は小牧の研究の続きとかいろいろおありだと思いますが、この研究は中期的にどういう方向にいくんですか。

柴田 その質問ですか（笑）。

質問 すみません。もうちょっと伺いたいのが、地理学の先生たちがいまどこを見て……。私が勉強不足なだけなのですが、経済地理の先生は比較的接点はあるんですね。人文地理が一番関係があるはずなのに「いまどこに向かっているんだろう？」というのが、単に素人だからか見えにくくて、あるいは「こういうことやっていいのに、なかなか皆さん研究しそうにないな」みたいに思っている感じがもしあれば……。

柴田 難し過ぎます（笑）。経済地理学者とは接点があるのですか。

質問 比較的、藤田昌久（1943-）先生とか大先生方……。

柴田 あ、藤田先生。いわゆる地理学界の中での経済地理学者とはちょっと違いますが、すごく優秀な人であることはよく知っています。なるほどね。人文地理学の向かっているところ……。答えるだけの自信がありませんが。

僕の研究に関して言うと、地政学の研究は、もうそろそろ区切りをつけたいなと思っていまして、つまり、これまで本国の小牧実繁を中心とするグループと、「満洲国」という植民地で地政学をやっていた人々について研究してきたのですが、さらに本国の中でも江沢譲爾とか別のグループについてもうちょっと膨らませたり、きょうつくりかけの文献リ

ストを完成させ、それらの文献を読み込んで、「戦前戦中の地政学の展開」みたいな感じでまとめることを考えています。これが僕の当面の目標です。

要は、戦前戦中に行われていた地政学というものは、これまで戦後的な見方で語られることが多かったんです。確かに大して完成度の高い学問とは言えなかったけれど、それを「未完成だ」と指摘するだけ終わらせていたのでは、それが実際どういう背景のもとにつくられて、同時代的にどういう意味を持ったのかがよく分かりません。なので、僕なりに小牧実繁を中心に戦前戦中の地政学を批判的に解釈し直しています。

そういった視点からの「戦前戦中の地政学の展開」みたいな本をまとめるつもりで、僕はいま研究をしています、人文地理学の先生方がどういう研究をなさっているか……。

質問 いえいえ、そこまで大きくはあれですが。

柴田 どういう答えがいいんですかね。

質問 別に模範回答はないので（笑）。

質問 小牧実繁は『世界地理政治大系』を16巻出していまして、それもすごい内容じゃないかなと。僕はもちろん全部は読んでいなくて、彼が書いた北極・南極みたいなのをチラッと見たけれど、大変よくできていると感じました。

だから、そういう実際の地誌、地理、そういう学問の数字を見たり、意外と若くて高かったのではないかと、いまより高いんじゃないかと思うくらいですが、その辺はどうなんですかね。

柴田 その『世界地理政治大系』に関して言うと、15巻出そうとしていたけれど、実際は半分くらいしか出ていませんので<sup>42</sup>、未完がたくさんあるシリーズではありますが、多分あのような制約があった状況の中では、比較的高い水準の地誌を書いたものだと思いますので、本当に若くしてよくやったなという気はしています。

ですので、地理学史的な意味では、これまでは日本の地理学が地政学によりつまづいたみたいに語られていますが、地政学が戦前・戦後の地理学にとって一体どういう意味があったのかは考え直さざるを得ないテーマなので、いま僕は研究しているわけです。

人文地理学という分野全体のことはしゃべれませんが、とにかくかなり広い分野でありまして、数量的な分析をやっている人もいれば、頭の中の空間認識の分析をやっている人もいるし、どこかの地域に出かけて、そこにどんな現象が生じているのかを空間的に考えたりする人もいたり、といった感じで、そう簡単に全体を語ることでできる分野ではないわけですが……、そうですね、いまどこに向かっているんでしょうね（笑）。

質問 小牧実繁は「タイに対するイギリスの植民の仕方は搾取型で、日本の皇道地政学は違うんだ」ということを主張していますよね。

柴田 していますね。

質問 だから、そういうのは正論であつたらうと私は思うんですけどね。

柴田 ええ。そもそも欧米の人たちに届いたのか、という問題はあるわけですが、NHKの海外向けラジオ放送で彼が行った講演の内容はアメリカにはちゃんと紹介されています<sup>43</sup>。少なくとも日本の人たちにとっては意味のある議論だったんだろうとは思うのです。

が、どうでしょうね。東南アジアとかの人たちが小牧の著作を読む機会があったかどうかはわかりませんが、さて、届いたのかどうか。

質問 当時、「タイと日本の航空路を早く引け」とか、立派な提案だったと思いますね。

柴田 ええ。限られたというか、さっきから言っているような状況の中では、十分に意味のある結論を導き出すくらいのことはやっていたんだろうな、とは思いますが。

質問 ここで伺うのも大変失礼なのですが、もともと地政学に先生がご関心を抱かれたきっかけはなんだったのですか？

柴田 いえいえ。細かな話で申しわけないのですが、大学2年生か3年生の頃に一人旅をしていまして、松山市のとある商店街にあった古本屋にたまたま立ち寄ったんです。「何か地理の本とかなないかな？」なんてふらっと入ったら、たまたま河野収『地政学入門』という1980年代くらいに出た本が転がっていました<sup>44</sup>。

それを買って読んでみたら、まさにきょうお話したような、マッキンダーがどうしたとかという話を書いてあって、世界の見方として「あれっ、これ結構おもしろくない？」って単純に思ったんです。

きょうは国土計画の話があまりできなくて本当に恐縮ですが、僕は基本的に「世界の見方」に興味があって、だから批判地政学の分析にひかれるのですが、世界の見方の一つとして「地政学」というのはおもしろいなど、その本を読んだときに率直に思ったんです。

そのとき、ふと「これは地理をやっていく上でおもしろいテーマになるかもしれない」と思ったのですが、よくよく先生とかに相談してみると、どうもこれはややこしい分野であることがわかりまして（笑）、「日本の、しかも小牧実繁を取り上げるなんて…」ということになったのですが、当時、神戸大にいた先生は、実は神戸外大に就職したばかりの若い頃、「イギリスにおける近代地理学の成立—マッキンダーとハーバートソン—」という論文<sup>45</sup>を書いていたんです。まさに今日お話した地政学の内容も含め、マッキンダーという人物がイギリスの近代地理学の成立にどう貢献したか、みたいな論文を書かれていたんです。

だから、「あっ、君、地政学やるの？」みたいなことで、「やめとけ」と批判されても仕方ない状況だったはずなのに、むしろ「おもしろいで。小牧実繁はまだ全然わかってないから、調べてみたら？」ということを言われてしまって、そっちの方向に進んでしまったということです。それがきっかけですね。

司会 ありがとうございます（拍手）。

（了）

- 1 ①倉前盛通『悪の論理—ゲオポリティク（地政学）とは何か—（Ohtemachi books）』日本工業新聞社、1977年。②倉前盛通『新・悪の論理—日本のゲオポリティクはこれだ—（Ohtemachi books）』日本工業新聞社、1980年。③倉前盛通『ゲオポリティク入門—国家戦略策定の仮説—』春秋社、1982年。
- 2 Gearóid ÓTuathail, 'General introduction: thinking critically about geopolitics', In Gearóid ÓTuathail, Simon Dalby and Paul Routledge eds., *The Geopolitics Reader (2nd ed.)*, Routledge, 2006.
- 3 「新しい地政学」および「批判地政学」については次の文献を参照した。①山崎孝史「地理と政治を結びつける言説」竹中克行ほか編『人文地理学』ミネルヴァ書房、2009年。②山崎孝史『政治・空間・場所—「政治の地理学」にむけて—（改訂版）』ナカニシヤ出版、2013年（初版2010年）。
- 4 近年出版された翻訳として次のものがあるが、全訳ではない。アルフレッド・セイヤー・マハン著、北村謙一訳『マハン海上権力史論』原書房、2008年（初版1982年）。
- 5 マハン著、水交社訳『海上権力史論（上）（下）』東邦協会、1896年。
- 6 ハルフオード・ジョン・マッキンダー著、曾村保信訳『マッキンダーの地政学—デモクラシーの理想と現実—』原書房、2008年（初版1985年）。同書の中に、1904年の講演録の翻訳「地理学からみた歴史の回転軸」も付録として収められている。
- 7 ①フリードリッヒ・ラッツェル著、由比濱省吾訳『人類地理学』古今書院、2006年。②F・ラッツェル著、向坂逸郎訳『ドイツ』中央公論社、1940年。③F・ラッツェル著、向坂逸郎訳『アジア民族誌』生活社、1942年。④ラツェル著、市川誠一訳『海洋論—諸国民発展の源泉としての海—』古今書院、1930年。『政治地理学』の翻訳は、戦中に阿部市五郎が着手したものの、後半の訳稿が戦災で焼失したこともあり、公刊されないまま今日に至っている。⑤阿部市五郎「地理学四十年」専修大学経済学会編『学問への道—小林・阿部・三島教授最終講義集—』専修大学経済学会、1968年。
- 8 ①ルドルフ・チェレーン著、阿部市五郎訳『生活形態としての国家』叢文閣、1936年。②ルドルフ・チェレーン著、阿部市五郎訳『地政治学論』科学主義工業社、1941年。③ルドルフ・チェレーン著、金生喜造訳『領土・民族・国家』三省堂、1942年。②は原著2章のみの部分訳である。
- 9 例えば、Frederic Sonder Jr., 'Hitler's scientists: 1,000 Nazi scientists, technicians and spies are working under Dr. Karl Haushofer for the Third Reich', *Current History & Forum*, June 1941.
- 10 「神話」化されたハウスホーファー像が英語圏に及ぼした影響については次の文献が詳しい。Henning Heske, 'Karl Haushofer: his role in German geopolitics and in the Nazi politics', *Political Geography Quarterly*, Vol. 6, No. 2, 1987.
- 11 ニコラス・J・スパイクマン著、奥山真司訳『平和の地政学—アメリカ世界戦略の原点—』芙蓉書房出版、2008年。
- 12 藤澤親雄「ルドルフ・チェレーンの国家に関する学説」『国際法外交雑誌』24巻2号、1925年。
- 13 飯本信之「人種争闘の事実と地政学的考察」『地理学評論』1巻9号～2巻1号、1925-1926年。
- 14 飯本信之「所謂地政学の概念」『地理学評論』4巻1号、1928年。
- 15 ①飯本信之『政治地理学』改造社、1929年。②飯本信之『政治地理学研究（上巻）』中興館、1935年。③飯本信之『政治地理学研究（下巻） 両米篇』中興館、1937年。④飯本信之『政治地理学（地理学講座 地理学本論）』地人書館1937年。⑤飯本信之『南米の経済地理（ラジオ新書70）』日本放送出版協会、1941年。⑥飯本信之・佐藤弘編『南洋地理大系』全8巻、ダイヤモンド社、1942年。
- 16 日本地政学協会については次の文献が詳しい。高木彰彦「雑誌『地政学』にみる日本の地政学の特徴」『史淵』146輯、2009年。



- 17 佐々木彦一郎「ゲオポリテークとエコノミック・デオグラフィ」『地理学評論』3巻4号、1927年。
- 18 石橋五郎「政治地理学と地政学」『地学雑誌』500号、1930年。
- 19 ①カール・アウグスト・ウィットフォーゲル著、川西正鑑訳補『地理学批判』有恒社、1933年。②川西正鑑「ファッショ地理学＝地理政治学（ゲオポリテーク）批判—その素貌及び方法論上の疑義—」『拓殖大学論集』3巻2号、1934年。
- 20 ①小原敬士『社会地理学の基礎問題』古今書院、1936年。②小原敬士「ドイツ政治地理学の現代的形態—政治経済地理学史の一節—」『横浜市立横浜商業専門学校研究論集』10号、1935年。
- 21 防衛研究所図書館所蔵の「高嶋辰彦陸軍省佐日記」（昭和13～16年）。
- 22 小牧実繁「地理学に志す人へ」『京都帝国大学新聞』1938年11月5日。
- 23 ①外務省条約局編（川上健三執筆）『竹島の領有』外務省条約局、1953年。②川上健三『竹島の歴史地理学的研究』古今書院、1966年（復刻新装版1996年）。
- 24 ①小牧実繁『近世探検史（ラジオ新書22）』日本放送出版協会、1940年8月。②小牧実繁『日本地政学宣言』弘文堂書房、1940年10月。③小牧実繁『東亜の地政学（東洋文化叢書）』目黒書店、1942年3月。④小牧実繁・川上喜代四『北極と南極（世界地理政治大系）』白揚社、1942年3月。⑤小牧実繁『日本地政学宣言（増補訂正版）』白揚社、1942年5月。⑥小牧実繁『日本地政学』大日本雄弁会講談社、1942年9月。⑦小牧実繁『続日本地政学宣言』白揚社、1942年11月。⑧小牧実繁『地政学上より見たる大東亜（ラジオ新書96）』日本放送出版協会、1942年12月。⑨小牧実繁編『大東亜地政学新論』星野書店、1943年12月。⑩小牧実繁編『大東亜地図大系（1）（2）（3）』博多久吉、1944年6月。⑪小牧実繁『世界新秩序建設と地政学（日本思想戦大系）』旺文社、1944年7月。⑫小牧実繁『日本地政学覚書』秋田屋、1944年9月。⑬小牧実繁・室賀信夫『大南方地政論』太平洋書館、1945年1月。
- 25 澤龍編『GHQに没収された本』サワズ出版、2005年。
- 26 ①高木惣吉『太平洋戦争と陸海軍の抗争』経済往来社、1967年。②藤岡泰周『海軍少将高木惣吉—海軍省調査課と民間人頭脳集団—』光人社、1986年。
- 27 ①海軍省調査課「東亜共栄圏の統一性についての地政学的考察（1941年9月）」土井章監修、大久保達正ほか編『昭和社會經濟史料集成第14巻 海軍省資料14』大東文化大学東洋研究所、1989年。②海軍省調査課「共栄圏における産業の配置（1941年11月）」同左資料。両報告書とも署名はないが、「地政学に造詣深き筆者に対し当課より委嘱せるもの」という付記と内容から、江沢が執筆したものと判断して間違いはない。
- 28 ①江沢譲爾『ハウスホーファーの太平洋地政学（ラジオ新書54）』日本放送出版協会、1941年8月。②江沢譲爾『地政学研究』日本評論社、1942年6月。③江沢譲爾『国土計画の基礎理論（経済全書14）』日本評論社、1942年9月。④江沢譲爾『南方地政論』千倉書房、1943年2月。⑤江沢譲爾『地政学概論（政治全書3）』日本評論社、1943年2月。⑥江沢譲爾『国土の精神（新潮選書）』新潮社、1943年8月。⑦江沢譲爾『地理—その基本問題—（文化科学選書）』育英書院、1943年11月。⑧江沢譲爾『国防地政論（国防経済学大系）』巖松堂書店、1944年11月。⑨江沢譲爾『国土と民族』目黒書店、1945年5月。
- 29 川上征雄『国土計画の変遷—効率と衡平の計画思想—』鹿島出版会、2008年。
- 30 山室信一「国民帝国・日本の形成と空間知」山室信一編『岩波講座「帝国」日本の学知第8巻 空間形成と世界認識』岩波書店、2006年。
- 31 竹内啓一「日本におけるゲオポリテークと地理学」『一橋論叢』72巻2号、1974年。
- 32 京都探検地理学会については次の文献が詳しい。山野正彦「探検と地政学—大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向—」『人文研究 大阪市立大学文学部紀要』51巻9分冊、1999年。
- 33 川喜田二郎「北部東亜大陸の地政学的一考察—とくに開拓の将来性について—」川喜田二郎『川喜田二郎著作集第2巻 地域の生態史』中央公論社、1996年。もとは1943

年に京都帝国大学文学部に提出されたものである。

- 34 ①今西錦司編『ボナペ島—生態学的研究—』彰考書院、1944 年（復刻版 1975 年）。②今西錦司編『大興安嶺探検—1942 年探検隊報告—』毎日新聞社、1952 年（復刻版 1975 年、文庫版 1991 年）。
- 35 ①梅棹忠夫「探検と地政学」『季刊探検』4 号、1943 年。②川喜田二郎「歴史・地理・探検」『京都探検地理学会年報』4 輯、1943 年。
- 36 戦後の室賀の代表的な著作として次のものがある。①Nobuo Muroga and Kazutaka Unno, 'The Buddhist world map in Japan and its contact with European maps', *Imago Mundi*, Vol. 16, 1962. ②南波松太郎・室賀信夫・海野一隆編『日本の古地図』創元社、1969 年。③海野一隆・織田武雄・室賀信夫編『日本古地図大成』講談社、1972 年。④室賀信夫『古地図抄—日本の地図の歩み—』東海大学出版会、1983 年。
- 37 ①織田武雄『古代地理学史の研究—ギリシア時代—』柳原書店、1959 年。②織田武雄『地図の歴史』講談社、1973 年。③織田武雄『古地図の世界』講談社、1981 年。④織田武雄『古地図の博物誌』古今書院、1998 年。
- 38 奥山真司「地政学を英国で学んだ」(<http://geopoli.exblog.jp/>)
- 39 古典地政学に関する訳書として次の 3 冊がある。①前掲注 11。②コリン・ 그레이、ジェフリー・スローン編、奥山真司訳・解説『進化する地政学—陸、海、そして宇宙へ—（戦略と地政学 1）』五月書房、2009 年。③コリン・ 그레이、ジェフリー・スローン編、奥山真司訳・解説『胎動する地政学—英、米、独そしてロシアへ—（戦略と地政学 2）』五月書房、2010 年。ほかにも現代の地政学に関する訳書を多数刊行している。
- 40 奥山真司『地政学—アメリカの世界戦略地図—』五月書房、2004 年。
- 41 奥山真司『“悪の論理” で世界は動く！—地政学 日本属国化を狙う中国、捨てる米国—』李白社、2010 年。
- 42 刊行されたのは次の 6 冊である。①別技篤彦『蘭領印度』白揚社、1941 年。②室賀信夫『印度支那—仏印・タイ・ビルマ・英領マレー—』白揚社、1941 年。③前掲注 24・④。④浅井得一『印度』白揚社、1942 年。⑤野間三郎『土耳其—シリア・パレスチナ・トランス・ヨルダン—』白揚社、1942 年。⑥米倉二郎『満洲・支那』白揚社、1944 年。ほかに『日本』（小牧実繁）、『太平洋』（別技篤彦）、『濠洲』（和田俊二）、『シベリア・蒙疆・西藏』（三上正利）、『アフガニスタン・イラン・イラク・アラビア』（松井武敏）、『欧羅巴』（野間三郎）、『アフリカ』（朝永陽二郎）、『北アメリカ洲』（川上喜代四）、『中南米』（柴田孝夫）という 9 冊の刊行が予定されていた。
- 43 ①Selden C. Menefee, 'Japan's global conceit', *Asia and the Americas*, June 1943. ②Russell H. Fifield and G. Etzel Percy, *Geopolitics in Principle and Practice*, Ginn, 1944.
- 44 河野収『地政学入門』原書房、1981 年。帰宅後、同書を確認してみると、見返しに貼られたラベルから、松山市銀天街の「坊っちゃん書房」で購入したことが判明した。ただし、同店は今年の春に惜しまれつつ閉店したようである。
- 45 長谷川孝治「英国における近代地理学の成立—マッキンダーとハーバートソン—」『神戸外大論叢』28 巻 1 号、1977 年。